

探究のポイント

第10回

このコーナーでは、新学習指導要領のキーワードの一つである「探究」について、「総合的な探究の時間」や各教科の授業で実践していく上でのポイントを、高校での取り組み事例などから見ていく。今回は、特別活動としてスタートした探究活動の成果を生かし、2020年度に「地域創造コース」を、2021年度に「科学創造コース」を新設した浜松学芸中学校・高等学校を紹介する。

浜松学芸中学校・
高等学校の
「探究のポイント」

- ◆部活動のように楽しく、生徒たちが夢中になって取り組める探究活動
- ◆フィールドワークをもとに地域の魅力を発信し、地元に着愛を持つ体験をさせる
- ◆教える役割は地域のプロフェッショナルに任せ、教員は生徒のやる気を持続させ、熱量を増幅させジェネレーターになる

特別活動から発展した地域密着型の取り組みを通して持続可能な探究の“学び”を追求する

浜松学芸中学校・高等学校

浜松学芸中学校・高等学校は静岡県有数の私学の伝統校であり、高校は普通科・芸術科からなる。同校では5年前から、生徒の自主性を育む特別活動の一環として探究活動に取り組んできたが、その蓄積と成果を背景に、普通科に2020年度より「地域創造コース」を新設し、さらに2021年度より「科学創造コース」もスタートした。どのような取り組みを経て、特別活動を持続的な探究活動に発展させ、コースの設立へとつなげたのか。内藤純一校長、進路課長の宇都元先生、地域創造コースのプロジェクトリーダーの大木島詳弘先生にお話をうかがった。

わずか5名からスタートした 地域調査のフィールドワークが発展

浜松学芸高等学校の探究活動は2017年度に始動したが、実はその前年、たたき台となる小さなチャレンジがあった。夏休みのゼミの1つに、「地域の魅力を知ろう」という講座が開設され、参加した生徒らが、浜松市北部を走るローカル鉄道「天竜浜名湖鉄道」を題材に地域の魅力の発信に取り組んだのだ。その舵取りを担った大木島詳弘先生（現・地域創造コースのプロジェクトリーダー）は、次のように当時を振り返る。

「ゼミに集まったのは、わずか5人。その生徒たちと沿



内藤純一 校長

宇都元 先生

大木島詳弘 先生

線のフィールドワークを開始しました。天竜浜名湖鉄道のPR活動をしたいので撮影許可をお願いします、と最初に挨拶に行った際の鉄道会社の反応は薄く、生徒たちも推薦入試の加点材料になれば、くらいの気持ちで参加していたようです。このローカル線は市街地から離れたエリアを走っており、生徒にとってまるで馴染みのない鉄道だったのです。ところが、丹念にフィールド調査を重ねていくうちに、多くの駅舎が文化財に登録されていたり、沿線のあちらこちらにノスタルジーを感じさせる風景があったりと、たくさんの魅力があることに気づき、その価値をいかにして発信することができるか、前向きに考えていくように生徒たちが変わっていきました」

この時のフィールドワークが土台となり、2017年度からの全校的な探究活動へとつながっていく。特筆すべきは、同校の探究活動が部活動との複数選択で、特別活動

としてスタートしたことだ。そこには、内藤純一校長の学校づくりへの思いが込められている。

「進学校である本校は、長年、受験勉強に重きを置いた学習指導を行っていました。しかし、それでは生徒たちの将来に役立つ、主体的な学びにはつながっていかない。そこで、部活動のように楽しく、生徒たちが夢中になって取り組める探究活動をスタートさせたい、と先生方に提案しました。自分がもし高校生だったら絶対通いたい、通いがある、そんな学校づくりをめざしたのです」(内藤校長)

地域密着型の活動というテーマ選びにも、同校の進学事情が関係している。大木島先生が説明を加える。

「本校は約95%の大学進学率ですが、地元の大学に進学するのはわずか17%ほど。市外・県外の大学に進んだ生徒の追跡調査をすると、浜松に戻って就職する卒業生は2割程度しかいません。自分たちが手塩にかけて育てた人材をみすみす他地域に流出させてしまう現実を打破するには、地元に着がえが持てるような原体験を生徒にさせることが重要です。そのための仕掛けとして、丹念なフィールドワークをもとに地域の魅力を生徒自身が発見・発信することを探究活動の柱として据えました」

失敗から学び、課題を克服 後輩に受け継がれた探究活動が コンテストでグランプリを獲得

5人から始まったプロトタイプの探究活動では、多くの課題が見つかった。とりわけ苦労したのが、自分たちの活動をいかにしてブランディングし、地域に周知させていくか、という問題だった。

「ローカル鉄道の全駅舎を撮影したり、撮った写真からA1サイズのPRポスターを作成するなど、いろいろとやってみましたが、コンセプトがキチッとないと魅力が伝わる作品にはなりません。コンテストに応募しても落選。この時期がいちばん苦しかったですね。そうした反省を踏まえ、2017年度から通年での探究活動を行うに際しては、生徒自らブランドポリシーをがつつりと固めたうえで活動に臨みました」(大木島先生)

ポイントは次の4つである。

- ・知っている場所から、行ってみたいくなる場所への変化を促す
- ・いつか戻って来たいと思える街の魅力を発信する
- ・中高生には共感を、大人には懐かしさを感じさせる青春を演出する
- ・地元の企業と協働する

ポスター制作に始まった「天竜浜名湖鉄道と沿線PRプロジェクト」は、その後、後輩たちに引き継がれ、観光プ

ロモーション動画の制作へと発展。ロケハン・撮影・演出・編集・音楽・出演など、すべてを生徒たちが手掛けた動画「天浜線のメモリー」は、2020年1月に開催された観光甲子園(全国高等学校グローバル観光コンテスト)の「インバウンド部門」で見事、グランプリを勝ち取った。

「指導にあたっていちばん意識したのが、“持続可能な探究活動”をめざすことでした。重要なのは、補助金に頼った活動にはしないこと。補助金が切れてしまうと活動が持続できませんから。では、活動資金をどうやって調達するかというと、商品開発や企業のポスター・CM制作を受注しています。さらに、後輩たちに活動を引き継いでもらうためには、どのように自分たちの“情熱”や“想い”を伝えていったらよいのか考えなさい、と指導しています」(大木島先生)

「衣」「食」「住」をテーマに 地場産業との協働プロジェクトが次々に始動 「地域創造コース」の新設へ

今年で5年目を迎えた地域密着型の探究活動は、「衣・食・住」をテーマに浜松の地場産業と協働する、さまざまな取り組みが行われている。その内容は多岐にわたるが、中でも「浜松学芸」の校名を一躍有名にしたのが、2019年からスタートした地場産業の浜松^{ちゅうまう}染浴衣を題材とした探究プロジェクトだ。きっかけは、地元の浴衣業者が、天竜浜名湖鉄道の観光ポスターに着眼し、浴衣をアピールするポスターを制作できないかと同校に依頼したことである。これを機に地元の浴衣業者との協働プロジェクトが立ち上がった。

市販の既成浴衣とは異なり、独特の染色を行う浜松^{ちゅうまう}染は反物で販売されており、着姿が想像できないという欠点がある。また、戦後は100軒を超えていた染色工場は現在4軒しか残っておらず、廉価な輸入浴衣に押されて産業の空洞化が進み、地域の若者たちが地場産の浴衣を身につけないという現状があった。そこで、この問題を解決するために、プロジェクトチームは、浜松^{ちゅうまう}染浴衣フォトカタログとポスターの制作を提案した。

初年度は、それまで浴衣の撮影はもちろん、着付けの経験もなかったため、何から何まで手探りだったが、試行錯誤で作成したフォトカタログとポスターが、地域の浴衣業者や関係者の方に受け入れられ、活動の継続が決まった。2年目、3年目と回を重ねるごとにクオリティが向上し、街角に貼られる浴衣ポスターも市民の間で好評を博した。新作柄の浴衣フォトカタログとポスターは、毎年、全国の販売店に向けて配布されるまでになっている。

「この浴衣フォトカタログ制作プロジェクトは、生徒



にも大変人気の高いプロジェクトです。カタログ制作だけでなく、実際に浴衣を着る機会を増やそうという目標の下、生徒らが浴衣姿でデモンストレーションする創作盆踊り大会「浴衣De Night」の開催や、浜松注染の浴衣生地でシャツを商品化する取り組みも行いました。完成した浴衣地シャツは本校の準制服にも指定されています」(大木島先生)

全国でも類を見ないユニークな地場産浴衣のプロモーション活動は、第3回全国高校生SBP交流フェアで第1位の文部科学大臣賞を受賞した。多くのメディアに取材され、現在に至るまで同校の探究活動の目玉となっている。このほか、「衣・食・住」の「食」をテーマとした活動では、農業や飲食産業との協働で地産地消の促進をめざし、「住」では林業と協働して住環境の改善や地元木材を利用したものづくりの取り組みが進められている。浜松学芸高校では、これらの地域密着型の探究活動の成果を系統的に繋げ、1年間をかけてカリキュラム化し、2020年度、普通科に「地域創造コース」を新設するに至った。

先生は地域のプロフェッショナルたち アイデアを形にする力と課題解決力を 段階的に身につける3年間

各学年2クラス(1クラス24名)からなる「地域創造コース」の学校設定科目「地域創造概論」「地域創造演習」の3年間のカリキュラムについて、紹介しておこう。

1年次(5単位)は、アイデアや企画を形にすることを前提とした5つのプロジェクト(学校紹介ポスター、注染浴衣、森林公園ポスター・CM、おにぎりプロジェクト、林業プロジェクト)に取り組みながら、地域のプロフェッショナルの指導を受け、段階的に地域の魅力発信に必要な力を身につける<図>。生徒に身近な地域の「衣・食・

住」の視点をバランスよく盛り込んでいる点が特徴だ。

2年次(4単位)は、自ら設定した地域課題の解決に取り組む。1年次のプロジェクト型学習で身につけた課題解決力を生かし、クリティカルシンキング、ラテラルシンキング(注1)を通して、地域が抱える課題に向き合う。自分の取り組む課題がなぜ地域の問題につながるのか、課題の発見から解決への道筋を理論立てて考察できる力を身につけていく。中間発表でプレゼン力を磨き、さらには外部コンテストなどへの応募を通して地域の魅力発信の実践と活動の検証を行う。

3年次(4単位)は、地域課題の解決に向けてプロフェッショナルと協働して実現化に取り組む。学年横断の取り組みを通して後輩の指導も行う。3年間の探究活動の総仕上げとしてこれまでの地域の学びを生かし、将来に向けてのキャリア形成を担う時期と位置づけている。

教師3人で2クラスを受け持つ 手厚いサポート体制を構築

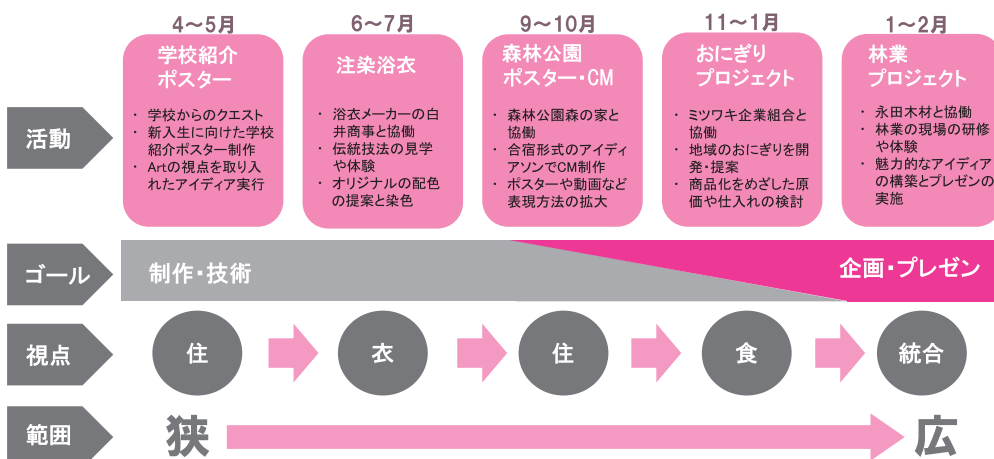
少人数の特別活動から正課の授業へと発展したことで、指導方法はどのように変わったのだろうか。プロジェクトリーダーを務める大木島先生にうかがった。

「まず、担任制度を見直しました。地域創造コースでは、2クラスを3人の教師がユニットを組んで担任しています。教員側のチャンネルを増やしたことにより、生徒のつまずきや悩みなどを支えられる、きめ細やかなサポート体制が組んでいます。もう一つは、教師の立ち位置が大きく変化しました。地域創造の学びにおいては、教える役割は地域のプロフェッショナルにお任せしていますから、私たちはティーチャーからファシリテーターという立ち位置に変わるんだと、当初は思っていました。ところが、いざ授業が始まってみると、生徒たちの

中からちゃんとファシリテーター役が出てきて、仲間をリードしていくんですね。では、私たち教師の役割は何か? 生徒たちのやる気を持続させ、時には燃料投下して熱量を増幅させるジェネレーターという立ち位置でいいのかなと。今はそう実感しています」

地域創造の学びは、

<図>地域創造コース 1年次のプロジェクト型学習 (大木島詳弘先生の原因を修正)



(注1) ラテラルシンキング: 固定観念や前提にとらわれず、水平方向に発想を広げる思考法。

「地域で生きていくためのライフキャリア教育と直結している」と語るのは、進路課長の宇都元先生だ。浜松学芸高校のインタビューを行った日、折しも教育実習で同校を訪れていた、卒業生のセライヤ龍介さんに話を聞くことができた。セライヤさんは、天竜浜名湖鉄道と沿線のフィールド調査に最初に取り組んだ5人のチームリーダー的存在だった卒業生である。

「この学校で探究活動をやってよかったなと思ったのは、浜松が帰って来なくなる魅力を秘めた街だと気づけたことです。僕は大学卒業後、この街に帰ってきて教師になることをめざしています。当時の仲間の一人は、プロモーションビデオを作る活動を通して音楽と映像のマッチングに目覚め、ミュージシャンをめざしています。別の仲間はパンフレットの制作を機に経済に興味を持ち、大学は経済学部に進学しました。僕たちの活動は地元の観光促進がテーマでしたけど、探究の学びって、こんなにも出口が幅広いんだなと実感しています」（セライヤさん）

他校との交流を深め 新たなフェーズへと前進

今年度から普通科に「科学創造コース」が新たに開設された。STEAM教育（科学・技術・工学・芸術・数学）を基幹とする、自然科学分野の探究活動に力を入れたコースである。内藤校長が新設の経緯を次のように語る。

「ここ数年間の探究活動の中で、自然科学系の取り組みが充実してきたことと、STEAM教育への取り組みにより、10年後、20年後の世界に貢献する人材を育てたいと思い、『科学創造コース』を新設しました。このコースでは、河合塾未来研究プログラム『ミライの洞察』^{（注2）}を高1の1学期に授業で取り入れ、探究のタネを見つけれられるようにしています。まだ始まったばかりのコースですが、構想をいろいろと膨らませ、少しずつ動き出しています。浜松市はものづくりの企業が多い街です。例えば、水素エネルギーを研究している地元企業と協働する探究活動などを考えています。また、静岡大学工学部との連携を図り、3人の先生に協働していただく計画も進んでいます。地域創造コースでも、静岡文化芸術大学と連携した授業が今年からスタートしました。地元企業や地域の大学との連携と協働は、持続可能な探究活動を実現するうえで欠かせないものだと考えています」

地域のプロフェッショナルとの協働による魅力的なプログラムが満載の「地域創造コース」と、子どもたちの未来の可能性を切り拓くために誕生した「科学創造コー

ス」。最後に、今後の課題と抱負について大木島先生にうかがった。

「さまざまな大会やコンテストに参加してみて実感することですが、他校が真似できないような技術を誇る発表が目立ちます。しかしながら、地域密着型の探究活動というものは、自分たちにしかできない特異的な活動であってはならないと思っています。“学ぶ”は“真似る”に通じると言いますよね。私は、成功した探究の実践例を学校同士で共有できるようなプラットフォームを創ることが、地域を学ぶ探究活動において急務だと感じています。本校の探究活動はフルオープン。求めがあれば、いくらかでも他校にノウハウを提供するというスタンスです。現在、地域創造コースで実施しているポスタープロジェクトの取り組みは、青森県や三重県の高校でも実施されています。本校の生徒たちが他校に指導役として赴きます。今年は熊本県でも実施する予定です。今後は教材などもフォーマット化して、他地域でも実践できるようにしていきたいですね。全国的な活動の広がりが、持続可能な探究活動へとつながるのではないのでしょうか」

浜松学芸高校の探究活動は、新たなフェーズに足を踏み入れつつある。

生徒たちの探究活動の成果

「天浜線のメモリー」

<https://youtu.be/vwGf4aTMiZA>

浜松注染浴衣の動画

<https://youtu.be/JWsZ-473CCK>

ポスター

https://www.instagram.com/hamamatsu_munekyun/

浜松学芸中学校・高等学校

◇所在地：静岡県浜松市中区下池川町34-3

◇創立：1902（明治35）年

◇高校・学級編成：普通科（特進コース、地域創造コース、科学創造コース）、芸術科（音楽コース、美術コース、書道コース）

◇生徒数：945名（2021年4月現在）

◇特色：創立119年。静岡県内の私学では2番目に長い歴史を持つ伝統校。1996年より現在の校名に改称、2008年度より中学を併設。「内観・受容・継続」の校訓の下、めざす生徒像に「じっくり考え、よりよく判断し、ねばり強く行動する生徒」を掲げ、教育活動の指針としている。

◇卒業生の進路：2021年3月卒業生258名

・進路：4年制大学207名、短期大学4名、その他47名
・合格者の内訳（過年度卒生を含む・延数）：国公立大50名、私立大576名

（注2）河合塾未来研究プログラム（ミライ研）：中高生と未来をもっと身近にする探究型プログラム。未来と自分の関係を「選択」「洞察」「科学」の3つの切り口で深める。<https://www.kawaijuku.jp/jp/research/future/>